

宝塚少女歌劇、はじまりの夢

宝塚歌劇と聞いて、読者各位はどんなものをイメージされるだろうか？

女性たちだけから成る劇団、カッコ良い男役スター、ライオンダンス、電飾の大階段、羽根を背負ったきらびやかな衣装……。本拠地の宝塚大劇場や、東京・日比谷の東京宝塚劇場周辺に集まるお揃いのウェアの女性ファンを思い浮かべる人もいるかもしれない。実際に公演を観たことがある人は、三〇分の休憩時間をはさんで三時間のうち前半がミュージカル芝居、後半がショーの二本立てが基本であり、時々一本立て大作を上演していることをご存じだろう。

タカラヅカが生まれたのは大正三年（一九一四）。一一〇年になろうとする歴史がある。創設当初の呼称は宝塚歌劇ではなく、宝塚少女歌劇だった。少女の二文字が消えたのは、戦争の影が色濃くなった昭和一五年（一九四〇）だが、『ベルサイユのばら』が日本列島を席卷した昭和五〇年（一九七五）前後にも、京阪神の阪急文化圏外の地方（三重県四日市市）の小学生だった筆者の周辺の大人や同級生たちは、宝塚歌劇を「少女歌劇」と認識し、実際そう呼んでいたように記憶する。

一世紀以上も昔、誕生したばかりの宝塚少女歌劇は、しかし、冒頭に挙げた共通イメージとは全く異なるものだった。ライオンダンスや大階段や羽根は、昭和二年（一九二七）に「レビユー」という様式をフランスから移植して以後のものである。現在と違い人気があったのは娘役のほうで、みんな娘役をやりたがるので、男役希望者は貴重だと言われた。ファンは圧倒的に若い男性が多く、むしろ現在



宝塚新温泉正面。入り口上方に「宝温泉」の看板がある。

の乃木坂46、櫻坂46、日向坂46といったアイドルグループの人気とダブる。一公演は基本五本立てであり、そして何よりも驚くのは、結婚後も舞台に立っていた団員がいたことである。

宝塚ファンにとっては当たり前の話なのだが、宝塚の団員は女性であるだけでなく、未婚でなくてはならず、結婚する時は退団せねばならない。そして宝塚の団員は「生徒」と呼ばれる。その背景にはいろいろあるが、昭和一四年（一九三九）に分離されるまで、劇団と学校が一体だったことの名残とも考えられる。団員が「生徒」なので、演出家は「先生」である。いずれにせよ、ブランドイメージとしての処女性性は、宝塚が宝塚たるアイデンティティの一つなのである。

阪急電鉄の前身である箕面有馬電気軌道の梅田（現・大阪梅田／大阪市）～宝塚（兵庫県宝塚市）間の本線と、途中駅の石橋（現・石橋阪大前／大阪府池田市）から分岐して紅葉と滝で有名な箕面（大阪府箕面市）に向かう支線が開通したのは明治四三年（一九一〇）だった。乗客を増やすために沿線の開発が進められ、宝塚本線の池田に分譲住宅地、箕面に動物園、そして宝塚に新温泉が建設された。

箕面有馬電気軌道はその名の通り、当初箕面と宝塚から有馬温泉（兵庫県神戸市）への延伸を目指したが、有馬までは実現しなかった。日帰り客が増えることを危惧した有馬温泉の旅館からの猛反対があったという説と、当時の技術では宝塚～有馬間の



パラダイス水泳場での曲泳ぎのアトラクション。ちよつと寒そうである。

危険な山間部を越える工事が難しかったからだという説がある。なお箕面有馬電気軌道が阪神急行電鉄（阪急）と改称するのは大正七年（一九一八）、同九年には神戸本線、一〇年には宝塚と神戸本線の西宮北口（兵庫県西宮市）とを結ぶ西宝線（現在の今津北線）が開通している。

宝塚新温泉は駅の南側を西から東に流れる武庫川の左岸に建設された。筆者が入手した当時の絵葉書の写真には、新温泉本館入り口に「宝温泉」という看板が見える。新温泉と呼ぶのは、武庫川右岸に旧来の温泉街があったからである。トルコ風大理石造りの大浴室が設えられ、旧温泉（本温泉とも呼ぶ）とは一線を画していたが、旧温泉がラジウムを含む炭酸泉であったのに対し、新温泉は武庫川の水を沸かしただけのものだったようだ。

大正と改元される直前の明治四五年（一九二二）七月、新温泉敷地内に室内プールをメインとする洋風の娯楽施設「パラダイス」が開場。当時としては画期的だったパラダイス水泳場だったが、屋内で温水設備がなかったために夏でも水が冷たく、また当時は男女が一緒に泳ぐことも禁じられていたために、プールは失敗した。

それでどうしたものかと考えて、思いついたのがプールに板を張って客席とし、一段高い所にあつた脱衣場をステージとして劇場にすることだったとされている。ただし劇場が失敗したらすぐにプールに戻すという心積もりもあつたようだ。

この屋内ブールを改装して造った（バラダイス劇場）で、宝塚少女歌劇の第一回公演が上演されたのが大正三年（一九一四）である。

演目が桃太郎を題材に採った『ドンブラコ』だったことはクイズ番組のネタなどにもなっている。新温泉自体が乗客誘致の方便であり、第一回公演が新温泉で客寄せのために開催された《婚礼博覧会》のアトラクションだったことから、観劇料はタダ。早い話が湯治気分分で気軽に観られる余興だったのだ。宝塚少女歌劇の前身は三越百貨店の「少年音楽隊」をヒントに第一回公演の前年、大正二年（一九一三）七月に結成された「宝塚唱歌隊」だったが、歌劇の上演を目指してその年の一月に「宝塚少女歌劇養成会」と改称されたことが、宝塚一〇〇年のい・で・き・始・め・と・な・つ・た。

「歌劇」という月刊誌がある。歌劇と言えば世間一般にはオペラのことだが、ここで言う歌劇とは取りも直さず宝塚歌劇のことである。タカラヅカのPR誌として、「歌劇」は劇場内のショップのみならず、阪急駅構内の売店や一般の書店でも販売されている。創刊は大正七年（一九一八）八月で、昭和十五年（一九四〇）から戦時中は休刊を余儀なくされたが、昭和二十一年（一九四六）に復刊し、平成二年（二〇〇九）一月号で通算一〇〇〇号を達成、令和の今日にまで至っている。

「歌劇」を創刊したのは小林一三（一八七三～一九五七）だった。

小林は阪急東宝グループ（現・阪急阪神東宝グループ）の創始者であり、宝塚歌劇の生みの親であり、創生期の宝塚音楽歌劇学校の校長である。小林の業績はあまりにも多岐にわたるため、とてもここにすべてを記すことはできない。池田の分譲地も、箕面の動物園も、宝塚の新温泉も、小林の偉業のほんの一部である。もともと文学青年で、慶應義塾在学中に新聞に小説を連載していたこともある小林にとって、「歌劇」は忙中閑の道楽という一面もあったようだ。



大正9年3月号(上)と大正10年6月号の「歌劇」。イラストはいずれも当時宝塚に籍を置いていた森田久(ひさし)によるもの。

現在池田文庫では、雄松堂出版刊の復刻版(一九九七〜一九九九)を含めて、大正七年(一九一八)八月発行の創刊号から令和の最新号まで「歌劇」の全号を読むことができる。旧漢字・旧仮名遣いはともかく、当て字や見たこともない異体字が並ぶ。それに加えて頻出する誤植、もって回った言い回しもあり、ともかくにも創生期の「歌劇」は読みづらいこと甚だしいのだが、それでもじっくりと丹念に読んでみると、この時代——大正という時代の文化や生活が細微に至るまで色鮮やかに蘇ってくる。

ここでちょっと日本におけるオペラの歴史について簡単にさらっておこう。

明治四四年(一九一一)に東京に帝国劇場が開場、歌劇部が開設され、のちに日本初の国際的歌手となるソプラノ歌手の三浦環(たまたま)らによるマスカーニの『カヴァレリア・ル

ステイカーナ」が部分上演された。

イタリア出身のジョヴァンニ・ヴィットリオー・ローシー（一八六七―一九四〇）を指導者として招聘（しょうへい）『天国と地獄』『セヴィリアの理髪師』『ボッカチオ』『魔笛』『椿姫』などを上演したが、評判はいま一つで経済的にも破綻し、帝劇歌劇部は創設からわずか三年で解散してしまふ。

ローシーは私財を投げ打って、赤坂にローヤル館という歌劇場を開設。団員にはバリトン歌手の清水金太郎（一八八九―一九三三）、ソプラノ歌手の原信子（一八九三―一九七九）ら帝劇オペラ出身者をはじめ、テノール歌手の田谷力三（一八九九―一九八八）もここからデビューしたが、こちらも興行的に立ち行かず、大正七年（一九一八）ローシーは失意のうちに日本を去った。

その帝劇出身者やローヤル館の参加者が立ち上げたのが、今も語り継がれる「浅草オペラ」（一九一七―一九三三）である。高尚な芸術を目指し、頑として入場料金を下げなかつたローヤル館の反省に立つて、浅草オペラは徹底した通俗化と低料金化を図り、若者たちの間に大ブームを巻き起こした。劇場周辺にはオペラに熱中し、女優を追い掛け回すペラゴロ<sup>ばつこ</sup>が跋扈する。ペラゴロとは、オペラのジゴロの意ともオペラのゴロツキの略とも言われる。

「恋はやさし野辺の花よ」「女心の唄」「コロツケの唄」などのヒット曲も生まれ、西洋音楽の大衆化に大いに貢献したが、数年を待たずに浅草オペラは爛熟（らんじく）を通り越して、次第に頹廢の色を深めていった。

そんな折、大阪に誕生したのが宝塚少女歌劇だった。宝塚は今も当時も兵庫県だが、中央あるいは全国から見れば、大阪みたいなもんである。それはさておき「宝塚」を発見した真面目なオペラ・ファンたちは、たちどころに少女歌劇に惹かれた。これこそが自分たちが求めていた「芸術」で

はないか。しかも団員は純粹無垢な少女ばかりである。そして大正七年（一九一八）五月、宝塚少女歌劇はついに帝国劇場で第一回東京公演を挙行した。「歌劇」の創刊号は、まさにその時機を捉える形で発行されたものだった。

今日宝塚歌劇は「娯楽」であり「文化」であるが、創生期の宝塚少女歌劇は、言わば娯楽以前の「余興」と、文化を超えた「芸術」という相反する二つの側面を持つていたのである。あまり知られていないが、宝塚少女歌劇は大正時代にすでに抜粋・短縮版ながらも『ヘンゼルとグレーテル』『マルタ』『カヴァレリア・ルスステイカーナ』『カルメン』『椿姫』など、本場のオペラに次々と挑戦している。

創生期の「歌劇」には、著名人からの寄稿も多かった。創刊号には、「武庫川の夕」と題した与謝野晶子（一八七八―一九四二）の吟詠三首が掲載されている。

武庫川の板の橋をばぬらすなり河鹿の声も月の光も

夕風は浅瀬の波をしろく吹き山をばおもき墨いろに吹く

風吹けば夜の川波に早がきの文字かく灯かな湯の窓にして

このうち第一首の歌碑が武庫川の右岸、フランスの彫刻家マルタ・パンのデザインによるS字型の宝来橋西側のたもとにある。小林が自宅に与謝野鉄幹・晶子夫妻を招いたこともあったらしい。

寄稿した著名人は坪内逍遙（一八五九―一九三五）、有島武郎（一八七八―一九三三）、小山内薫（一八八一―一九二八）……と枚挙にいとまがない。若き日の今東光（一九一八―一九七七）、演芸評論家の正岡容（一九

○四一(一九五八)も連載を持つていた。珍しいところでは、千里眼事件でオカルト・ファンには有名な超心理学者の福来友吉(ふくらいともきち)(二八六九一―一九五二)や「おさるのジョージ」シリーズを翻訳した光吉夏弥(みつよし)(二九〇四一―一九八九)の名前も見える。

文筆家以外にも洋画家・小出檜重(こいでならしげ)(二八八七―一九三二)の私信や、大正一〇年(一九二二)八月から翌年二月にかけて洋行していた山田耕筈(やまのたけはら)(二八八六―一九六五)が、七年間にわたって書き溜めていたスコアを紛失し現地で演奏会を開けなかったというエピソード、またサン・サーン(二八三五―一九二二)の訃報を受けて、晩年のサン・サーン邸を訪ね、ピアノの演奏を聴かせてもらったという徳川頼貞(とくがわよりまさ)(二八九二―一九五四)の手記なども掲載されている。

常連寄稿者の中に青柳有美(あおやぎゆうび)(二八七三―一九四五)という畸才(きさい)がいる。本名は猛(たけし)。ウィキペディアには「ジャーナリスト、随筆家、牧師」とだけあるが、青柳の遍歴を記すだけで評伝が一冊書けるほどである。同志社普通学校を卒業後、女学校で英語と倫理を教え、中学校でも教鞭を執り、新聞記者をやったり、主筆も務め、雑誌の編集に携わっていたこともあり、一時はタバコ屋を営んでいたこともあり、電力会社の社員だったこともあり、著書が発禁処分を食らったこともあった。

雑誌「女の世界」の記者として、オペラ歌手・原信子(はらのぶこ)(二八九三―一九七九)の自宅に取材で訪問した際には、隣室で聞いていた原の母が「之まで随分いろいろ沢山の人が訪ねてこられたが、青柳さんのやうに、あんなに能く音楽の事に就て調べて為らっしゃった方は無かった」と驚嘆していたと原自身が述懐している(大正一一年二月号「ベッソールド夫人論」を読んで)。

「歌劇」への寄稿は大正八年(一九一九)四七歳の時からである。現在も続く読者投稿欄の「高声低声」には毎号のように質・量ともに他を圧する原稿を寄せ、生徒のこともズケズケと批評、これに反

発する若い投稿者に対しいささかも引き下がることなく遠慮なく論駁ろんぱくしたので、同欄は毎号のように炎上した。

このような罵倒合戦が絶えず、無難な投稿しか採用されない今日からは想像もできないような当時の「高声低声」だったが、熱心な議論の場であったことは間違いない。「高声低声」だけでなく小林校長をはじめ、先生と呼ばれる作・演出家や学校内のスタッフ、外部の有識者からの寄稿、生徒らの手記により、映像では残り得なかった光景、時代の熱気や息遣いが伝わってくる。劇場内部の様子、ファンの気質、スペイン風邪、関東大震災前後の東京や地方都市の風景、少女たちの日常——。

本書では、創生期の「歌劇」の「高声低声」をはじめとする投稿や他の記事から、学術的アプローチではこぼれ落ちてしまうような小ネタを、出来る限りつぶさにすくい取ってみようと思う。そうすることによって、宝塚少女歌劇という現象を超えて、わずか一〇〇年前の明治と昭和に挟まれた大正という時代そのものが見えてくると思うのである。

本文中特に断り書きのない限り、引用は「高声低声」からのものである。書体を変えて記した引用部分は当時の文体の雰囲気伝えるために、明らかな誤字や誤植を除き、旧仮名遣い・当て字・現代とは異なる送り仮名はそのまま残した。ただし旧漢字や異体字は新漢字に改め、読みやすさを考慮して句読点を整理し、適宜補った。また難読と思われる漢字にはルビを施し、促音、拗音は小文字表記に修正、強調のために原文にはない傍点を付した箇所もある。固有名詞については、現在一般に用いられている表記を採った。

引用の中には現代の感覚ではどうかと思われる表現や内容はあるけれども、当時の空気を映すものとして何卒なにしろご理解を賜りたい。

目次

まえがき——2

第1章 パラダイス劇場と公会堂劇場——17

宝塚の前風景——18

蝶とダルマと桃太郎——20

新歌劇場と観客の「お粗末」——25

余興場と大理石の浴場——30

混雑と混乱は続く——35

組のはじまり——37

第2章 組の誕生とファンさまざま——45

浅草オペラの爛熟と衰退——46

少女歌劇に求められたもの——49

花組、月組の誕生——51

若きッT党ッたち——56

不良少年とヤジ——63

### 第3章

作家と作品——73

化粧・声・髪型——74

新しい歌劇の模索——76

創生期の作家四天王——78

久松一声——78

棟茂都陸平——82

坪内士行——86

岸田辰弥——91

### 第4章

音楽歌劇学校そして火事——101

学校設立——102

「生徒」は「女優」にあらず——108

新校舎と運動会——110

第5章

松竹と少女歌劇いろいろ——127

ライバル出現——128

松竹楽劇部 vs 宝塚少女歌劇——132

東西の歌劇団いろいろ——136

東京少女歌劇と谷崎歳子——140

ニセモノ続出——143

女工たちの少女歌劇——146

第6章

高砂松子——149

オッチョコチョイでお転婆な少女——150

高砂の真骨頂——153

運動会の準備——115

新校舎での新年会——116

火事そして突貫工事——117

動物たちの追悼会を開く——119

花組中国地方三都市公演旅日記——121

オフの高砂へ思い出—— 156  
結婚そして舞台—— 160  
読者からの引退勧告—— 164

第7章

生徒たちの日常—— 167

寄宿舎生活—— 168

幼い日のこと—— 171

弟たち—— 172

早逝した生徒たち—— 174

公演半ばで倒れる生徒たち—— 177

入院、手術—— 179

正岡容の恋人—— 182

病室にて—— 186

夢よ—— 188

第8章

関東大震災と市村座—— 193

「歌劇」に記録された関東大震災—— 194

第 9 章

大劇場完成 — 211

下足番のいる劇場 — 212

課題いろいろ — 214

四〇〇〇人劇場を如何にすべきか — 218

小林一三の演出構想! — 219

歌舞伎、京劇、新国劇、イタリアオペラ — 222

「歌劇」愛読者大会 — 225

昭和と平成の大劇場 — 229

宝塚で歌舞伎を — 196

交流 — 200

行き違い — 202

震災後の東京公演 — 205

東京の復興とラジオ出演 — 207

第 10 章

小林一三 — 231

みかんと議論 — 232

芸術は商品である——234

見果てぬ夢——238

上海のロシア人ファン——242

国民劇とは——243

さア帰って寝ろ！——245

小林一三に会える場所——246

あとがき——250

参考文献——254

絵はがき・パンフレット等——著者所蔵  
デザイン——三木俊一（文京園案室）  
装画——中島梨絵

公会堂劇場

パ  
ラ  
ダ  
イ  
ス  
劇  
場  
と

第  
1  
章



宝塚パラダイスの外観。当初はこの中に室内プールがあった。

## 宝塚の前風景

私が最初宝塚を知ったのは幼年時代で、ある年の秋、さんだ三田へ茸狩の帰途に立寄った。当時はまだ電車は通じてゐないで、無論新温泉はおろか、現今のかみなた彼方河岸の旧温泉があつたきりで、温泉宿もずいどう隧道式入口の分銅屋があつたのみ。幅の狭い木橋が危ぶなげに山峡らしく、今と変らないい磯にかかつてゐたことを記憶する。

(大正三年八月号「吾叱譜」寺川信)

「歌劇」に描写された明治末から大正初めにかけての宝塚界隈のスケッチである。筆者の寺川は、「歌劇」の編集を小林から引き継いだ初代編集長。阪急社員で短歌や俳句を嗜む文人だつた。「歌劇」の編集担当はその後、演出家として宝塚の礎を築いた堀正旗(一八九五—一九五三)、のちに「婦人画報」の編集長となり、戦後日劇ミュージックホールのプロデューサーとなつた丸尾長顕(一九〇一—一九八六)へとバトンタッチされ、このエッセイが寄せられた時点では、三代目の丸尾が編集を担つていた。

- 明治三〇年(一八九七) 阪鶴鉄道(現・JR福知山線)の宝塚駅開業
- 明治三二年(一八九九) 阪鶴鉄道の三田駅開業
- 明治四三年(一九一〇) 箕面有馬電気軌道(現・阪急電鉄)の宝塚駅開業
- 明治四四年(一九一〇) 宝塚新温泉の開場

宝塚のさらに奥、三田駅(兵庫県三田市)の開業は明治三二年(一八九九)の一月。いっぽう箕面有馬電気軌道の開通は明治四三年(一九一〇)の三月を待たねばならず、寺川少年が汽車に乗ってキノコ狩り

に出かけたのは、明治三二年から明治四二年（一九〇九）までの秋ということになるか。エッセイの内容を少し詳しく見てみよう。

分銅屋は橋を渡って武庫川右岸の旧温泉街にあった料理旅館である。通りの南側の城郭のような石垣の上に木造二階建ての建物があり、旅館内に入るためにはアーチ型の小さなトンネルをくぐる必要があった。昭和五八年（一九八三）まで営業していたようだ。現在同地には新しい石垣が生まれ、公園として整備されているが、一部に分銅屋時代のものと思われる石組みを見ることが出来る。

幅の狭い木橋というのは蓬萊橋ほうらいばしだろう。初代の橋は一本足の橋脚が細い橋桁げたを支えていた。明治三六年（一九〇三）発行の『宝塚温泉案内』の口絵写真に既に「宝来橋」の表記が見える。

キノコ狩りの数年後、寺川は新温泉で開催された大阪新報主催の子規十三忌（一九一四）の句会に参加している。宝塚の停留所（電車の駅。当時は汽車は駅、電車は停留所と区別していた）から温泉までの道に人家は一軒もなかった。

その時は、新温泉は現在の浴場だけの建物があって、その横に別棟で小舎がけの舞台附の納涼場が当日の会場になってゐた（略）パラダイスが建ち、室内遊泳場が出来て、其処そこに少女歌劇が開かれるやうになったのは、それから又二、三年後のことである。（同前）

新温泉内ではおみやげ用の絵はがきも売っていた。正岡子規の十三回忌は大正三年（一九一四）であり、この年の四月、室内プールを改築して造ったパラダイス劇場で宝塚少女歌劇第一回公演が開催されているので、「子規十三回忌の二、三年後にパラダイスや室内遊泳場ができた」という寺川の記憶は正しくない。新温泉の開場は明治四四年（一九一）五月一日、パラダイスのオープン翌年明治四

五年（一九二二）七月一日である。

歌劇ひらがが開れる迄までに私は一度、私の翻訳のストリンドベルヒの「父」を近代劇協会の一部の人々、神林、宇田、日比、岩崎君等が上場するといふので、ある夏の夜に訪ねて来たこともある。その年の末頃に、淡桃色の地に胡蝶の羽根をひろげたやうな、少女の舞姿の写真を印刷されたポスターを街上の軒々で見かけたのである。

（同前）

少女歌劇以前に、新劇の近代劇協会が翻訳劇を新温泉で上演していたというエピソードが興味深い。大阪からの入浴客誘致が目的なので、新温泉での余興は「大阪にはないもの」というのが第一条件だった。新温泉開場時には、名古屋から西川石松一門の「名古屋踊り」を招聘して、二週間ほど公演を行ったが（大正二三年二月号「宝塚ベラゴア読本（五）」青柳有美）、新温泉オーブン前の印刷物には大阪南地（いわゆる大阪ミナミ）の「芦辺踊あしべおどり」の告知も掲載されている。活動写真なども上映されていたようだ。

### 蝶とダルマと桃太郎

大正三年（一九二四）四月一日、室内プールを改造したバラダイス劇場で、宝塚少女歌劇第一回公演開催。演目は歌劇『ドンブラコ』と喜歌劇『浮うかれ達磨だるま』とダンス『胡蝶』、他に器楽合奏や舞踊が付いた。これに先立ち前年の大正二年（一九二三）七月、「宝塚唱歌隊」第一期生として高峰妙子・雲井浪子なみこら一六名が、一一月に第二期生として篠原浅茅しのはらあさぢ・瀧川末子たきがわすえこら四名が採用された。

一二月には歌劇の上演を目指し、宝塚唱歌隊は「宝塚少女歌劇養成会」と改称。唱歌隊の指導のため夫人の千恵子と共に招かれていた音楽家の安藤弘ひろむが、歌やダンスを習っている少女たちを見た小

林から「歌劇がやれるかい？」と打診され、「出来ます。やらせて見ませう」と答えたという（大正二年一月号「宝塚ベラゴア読本（五）」青柳有美）。

「歌劇」は大正七年（一九一八）の八月創刊なので、大正三年の第一回公演の模様をリアルタイムで辿ることはできない。しかし創刊号以降の記事や寄稿から、かなり具体的にその前後のことは窺い知ることができる。大正十一年（一九二二）三月号に掲載された「宝塚少女歌劇画史」というイラスト（森田ひさし）に添えられたキャプションを拾ってみよう。

一 大正二年に初めて日本に少女歌劇なるものが宝塚に生れた。読んで字の如しの歌劇といふことから判らなかつた時代で、観客なんでもは皆お湯から上つての休み場所位に心得て、寝そべつてゐるものあれば、小児の寝かし場にもなつて。日本名物の宝塚少女歌劇も、生れた時はこんな有様であつた。それでも舞台は一生懸命でやつてゐるのが気の毒なほどであつた。

そう、あくまでも温泉地の余興なのである。同年四月号の「高声低声」には、「第二歌劇場（＝パラダイス劇場）の畳の後の方で子供達が角力を取つたり、寝ころんだりしてゐた」ともある。椅子のない畳敷きのだつ・広い平場だったこともあるが、なかなかの光景だ。正面席の床には、縁のない琉球表が敷き詰められていたという話もある。

二 管絃合奏がすむと、うかれだるまといふのが幕しまひになつて、ダンダダルサンが踊り出す、こんなコーラスがあつて、ダルマサンが踊り出す。何の事はない棚のだるまさんだったが、それが又子供達の人気をよんで、いづれは母さんも尻をすゑて見物する様になつた。毎日だるま

さんが舞台の上ではね廻った。

次の項の記載と合わせてイラストのキャプションが正しければ、大正三年（一九一四）四月の第一回公演以前に、パラダイス劇場では管弦合奏や演目の一つ『浮れ達磨』が試演されていたことがわかる。『浮れ達磨』は作歌（作詩）が「早春譜」の吉丸一昌、作曲が「七つの子」「青い眼の人形」の本居長世、そして振り付けが七代目松本幸四郎。宝塚のオリジナル作品ではない。敬文館刊の『うかれ達磨』には、明治四五年（一九二二）白木屋百貨店の少女歌劇団による店舗内余興場での試演の写真が掲載されている。

少女たちがダルマを転がして、ダルマの目が向いたほうの者は歌や踊りを披露しなければならぬという遊戯<sup>レ</sup>達磨ころがし<sup>レ</sup>に興じている。転がした小さなダルマの目が舞台中央の大ダルマに向いたところ、手足がニョキニョキ出てきて踊り出す。生徒の父兄から、少女たちの手足をムキ出しにされては困る、とクレームが付いた。なおキャプション中の「ダンダダルサンが踊り出す」という歌詞は、「だんだんだんだん達磨さんは、だんだん誰を睨む」が正しい。

三 その年の春には婦人子供博覧会が開かれたので、ドンブラコが上演された。之れが又子供達<sup>こ</sup>の見物<sup>けんぶつ</sup>で人気を取った。この時から始めてダークチェンヂ（暗転）が利用されて、鬼が島がそれによって場面の変化を見せた。今から見ると馬鹿らしいやうなものだが、それでも大道具は白鉢巻で舞台の忙しさを感じた。

記念すべき第一回公演のお伽歌劇『ドンブラコ』である。北村季晴<sup>すえはる</sup>作詞・作曲、物語は桃太郎が雉

子・山拳蔵・真白野猿之助・犬野腕三郎を引き連れて鬼退治に行くというお馴染みのもの。日露戦争（一九〇四―一九〇五）がまだ記憶に新しい頃（一九二二）の作品とは言え、鬼が島でロシア正教の聖歌を思わせるコーラスが聴こえたり、最後に桃太郎が「幸に首尾よく大任を果す事の出来ましたのは、これ偏に御代の恵み（略）帝国万歳！」と言って、全員で「君が代」を斉唱したりするなど、ビツクリさせられることも多い。

振り付けはお伽作家の高尾楓蔭の助手として来宝し、宝塚少女歌劇の日本物の礎を創った久松一声（一八七四―一九四三）。久松は『浮れ達磨』の振り付けも担当していた。

『胡蝶』はドイツ出身チェリスト、ハインリヒ・ヴェルクマイスター作曲の歌劇『胡蝶の舞』に基づくダンスだった。作曲は数多くの軍歌や鉄道唱歌を作った目賀田万世吉という記録もある。振付は高尾楓蔭という記録と、清水谷高等女学校の中島という女性教師だったという話もある。

音楽指揮は東京音楽学校卒で前出・安藤と同窓だった高木和夫。のちに大正二二（一九三三）年五月から一年半のヨーロッパ留学を経て、昭和二年（一九二七）日本初のレビユー『モン・パリ』の音楽を担当することになる。この時は一人でピアノを弾き、舞台上で指揮もした。

三のキャプションで《婦人子供博覧会》とあるのは正しくは《婚礼博覧会》、そのアトラクションということで、「結婚マーチ」など少女らによる管弦合奏もあった。ちなみに《婦人博覧会》はこの前年（一九二二）に新温泉パラダイスで、またこれとは別に《山林こども博覧会》という催しが明治四四年（一九一三）に箕面動物園で開催されている。

管弦合奏の時、生徒が胸から模様のある振袖を着ていると、あんな風儀のよくない姿をさせられては、とまた父兄からクレームが入った。筆者は同時代の人間ではないし、着物の流儀も知らないのでは、何が良くないのか皆目わからないが、デザインが派手だったのか、あるいは袖ではなく胸に柄をあし

らうこと自体がNGなのか、いずれにせよ一般の良家の娘には相応しからぬ装いだっただろう。

#### 四

その次は浦島太郎が上演され、始めて（ママ）歌劇団の創作が生れた。パツクリパツクリツイ、恁こんな唄が見物の子供達にも記憶にのこって、パツクリを見にゆかうよ、なんて子供は母にせがんだ。今の雪野富士子なんかも小さい見物けんぶつの仲間に入って、パツクリパツクリツイをよくおぼえ込んだものだった。

龍宮へ行く太郎をのせた亀の縄がよく見物にも見えた所などは御愛嬌で、大道具がヨイヨイとばかりにその縄を引たくって有あり々と舞台裏で引張つてゐるのが見えたが、それでも平気だった。

『浦島太郎』は、『ドンブラコ』の次の夏季公演の演目である。『ドンブラコ』『浮れ達磨』『胡蝶』いずれも既存の歌劇もしくはそのアレンジだったので、『浦島太郎』は初のオリジナル作品ということになる。作・音楽は安藤弘。「パツクリパツクリツイ」というのは、龍宮城の海底ダンスの場で、えび・たい・たこ・ふぐ・ひらめ・さば・とびうお・おこぜ等の踊り子たちが踊る際の合唱に出てくる合いの手のフレーズである。これは現在でもSPレコードの音源を聴くことができるが、確かに印象的なフレーズである。

さて実際に舞台上に立っていた少女たちは、どんな風に初日を迎えたのだろうか。

『ドンブラコ』で主役の桃太郎を務めて「男役第一号」と呼ばれ、退団後は音楽講師として後進の指導に当たった高峰妙子（一八九九―一九八〇）という生徒がいる。

小学校の頃から読み書きや唱歌、とりわけ朗読が得意だった高峰は、女子師範学校に入学するはず



寶塚少女歌劇團 第四部  
主演 高峰妙子  
監督 佐藤 武

高峰妙子 大正9年『西遊記』の趙雲。

だったが、警察官だった父の友人の勧めで宝塚唱歌隊に加わった。歌の先生は安藤千笑。表記は違うが、安藤弘夫人の千恵子のことである。夫・安藤と同じく東京音楽学校出身で、日本初の国際的オペラ歌手・三浦環とは同級だった。千恵子の兄は新温泉の経営に携わっていた。高峰の述懐を辿ってみよう(大正一〇年一月号「思ひ出のままに」)。

——千笑先生から最初は主にピアノを、そして声楽は女学唱歌やコールブゲン(ママ)を習った。弘先生が来られてからは、お伽歌劇桃太郎を教わった。「むかしむかしそのむかし爺さまと婆さまがあったとサ」と歌った時は、思わず吹き出してしまった。三か月余りで桃太郎の生い立ちから鬼が島征伐まで殆んど五場もある歌を暗記したが、楽譜がよく読めず苦労した。ピアノもヴァイオリンもセ、口も鉄琴もやった。

そのうちダンス教師として、清水谷高女の体操教師の中島先生が来られ、いよいよ忙しく死に物狂いで勉強した。夜中に桃太郎の「木遣節」を唄って、父を驚かした。兵隊のマネをしてヴァイオリンの弓を折ってしまい、高木先生から大目玉をいただいた。「桃太郎」の時は、宝塚の芸者連が化粧を手伝ってくれた。初舞台は誰も彼も震えるばかりで、何を歌ったやら、無我夢中だった——。

### 新歌劇場と観客の「お粗末」

こうして産声を上げた宝塚少女歌劇は、《婚

『礼博覧会』主催者の大阪毎日新聞の紹介記事や、また無料だったということもあり、四月一日の初日から五月末日の千秋楽まで連日満員の賑わいを見せた。が、次の夏季公演「パツクリパツクリ」の『浦島太郎』から、少女歌劇は早くも不入りに喘ぎ始めることになる。

客が来ないので、毎日開演時間になると、新温泉の小使いさんが大きなベルを提げてガランガランと市中くまなく振って歩いたが見物人は来ない。やむなく事務所から旅館や料理店に電話をして、客を寄こしてくれるよう依頼したり、女中さんでも子供でも何でも構わぬから来てくれと懇願したりした。雨の日は見物人が五〜六人だけということもあった（前出『宝塚ベラゴア読本（五）』）。

舞台の登場人物はたいいてい一〇人以下で、伴奏も四〜五人ぐらい、伴奏はピアノとヴァイオリンだけ、時にはピアノだけということもあり、ヴァイオリンは生徒が交代で演奏していた。雨の日などは、『舞台の人と見物人とまるで一緒になって遊んでゐる様』だったという（大正一〇年七月号『思ひ出 紅娘花』）。客席の後部では、小さな子供が舞台の生徒たちの振り付けに合わせて、一緒に踊っていたこともあった。

箕面有馬電気軌道の重役会議ではパラダイス劇場廃止案が提出され、小林はポケットマネーを出しても維持すると啖呵たんかを切ったという話もあったが、これについては後年小林自身が廃止論は全く存在しなかった、宣伝のために流した情報ではないか、と全面否定まきしている。

ともあれ、制作費の削減ということはあったのだろう、この時期の演目には、慶應義塾在学中に故郷の山梨日日新聞に小説を連載していた元・文学青年の小林の筆による作品がズラリと並んでいる。大正四年（一九一五）正月の少女歌劇の公演は小林の『兎の春』のみ、大正六年（一九一七）の夏季公演は五作品中四作品までが小林の作品だった。

そんなガラガラの客席に、第一回公演から欠かさず足を運んでいたのは「西洋洗濯屋の職工」と

「箕面の某真言寺院の僧侶」と「大阪師団の歩兵軍曹」の三人だったと青柳有美は記している。その真否はともかく、「高声低声」の常連投稿者を見ても、創生期の宝塚少女歌劇が男性ファンによって支えられていたことは間違いない。

かくも当初は集客に苦勞していた少女歌劇だったが、大阪の帝国座や神戸の聚楽館、須磨の住友別邸での慈善歌劇会や依頼公演を重ねるうちに、次第に知名度を上げていく。興味深いところでは、大正七年（一九一八）六月一八日に大阪・中之島にあった大阪ホテルで、東洋一の製薬会社と謳われた星製薬の創業者・星一（一八七三—一九五二）の宴会のために『神楽狐』を上演している。星一はSF作家・星新一（一九二六—一九九七）の実父である。

一日あたりの平均入場人数も、大正三年（一九一四）には一一三二人だったのが、大正四年は一三二九人、大正五年は一五六一人、大正六年一八五三人、大正七年には二二二六人と着実に増えていた（大正八年八月号「再び東京帝国劇場に宝塚少女歌劇を公演するに就て」小林一三）。

そして「まえがき」でも触れたように、大正七年（一九一八）五月ついに帝国劇場で初の東京公演を開催、その帰途には名古屋の御園座、京都の岡崎公会堂でも公演を行った。「歌劇」が創刊されたのも、この年の八月である。少女歌劇を観るために押し寄せた人々で小さな劇場は穴蔵のように蒸し暑く、汗臭いという状況になってきたため、解体予定だった箕面駅前（現・箕面駅前）の公会堂を移築し、大正八年（一九一九）三月新たに開場することになった。

小林は大菊福左衛門のペンネームで新歌劇場、通称〈公会堂劇場〉の開場に当たって、こんな自賛の一文を寄せている。

（新歌劇場は）パラダイスよりは気分が晴々するほど、愉快に、広闊に、美しいカーテンを前に、

何とも言へぬ、歌劇気分ひたされるやうに嬉しく思ひました。

(大正八年四月号「美しい新歌劇場の客席より」)

新しい緞帳どんちようは伊東胡蝶園からの寄贈だった。伊東胡蝶園は化粧品メーカーだが、東京公演の実施に尽力した出版社、玄文社の親会社である。従来のパラダイス劇場に比べてキャパシティが三倍になり、二〇〇〇人を収容できるようになった公会堂劇場だったが、実体としては、

新歌劇場は歌劇に相応ふさわしい等な云なつて居るものもあるが、お世辞は止めさせよ。窓障子、鶴亀席等を見よ。下品なる安物芝居・活動小屋かむに異からぬ。歌劇気分でもあるまい。

(大正八年八月号)

幕間まくわには活動写真館のかき餅かきもち売りのように、絵葉書や写真を売りに来た。上演中に売りに来ることもあった。中央の電灯の粗末な装飾が全体を貧乏くさく見せ、広い観客席に電灯は数える程しかついていない。逆に開演しても客席が暗くならず、四方から太陽光が入ってくる。扇風機が五、六台あるにはあったが、あまり役に立っておらず、しかもギーギーとうるさかった。

いっぽう舞台はと言うと、間口が広い割に奥行きが浅く、天井も低かった。舞台にはセリもあつたが、薄汚い板張りのむき出しのまま、あまり掃除もなされていなかった。

私は歌劇を見るたびに一番イヤな心持こころもちがすることは、舞台の上で綺麗な顔をしてゐる少女達の、足の裏がキタナク、黒くよごれて誠に見苦しいことであります。

(大正八年二月号)

舞台を清らかにして欲しいのです。少し少女たちが激しく演じると埃ほこりがたち、為ために前方に居るも

のは困ることがあります。

(大正九年一月号)

『ドンブラコ』以来、久し振りに来宝したという児童文学者の巖谷小波(いわやささなみ)(二八七〇〜一九三三)も、「七年前の舞台とは全く場所が変つて居る。それで広くはなつた様だが、何だかそのお粗末さは、いかにも内容とふさはぬ観がした」(大正二〇年一月号「七年振りに来て見て」と書いている。「お粗末」という言葉が他にも何度か出てきて、それが観客の偽らざる印象だったようである。劇場もさることながら、観客のマナーもたいがいのもんだつた。

歌劇場の中で重箱や折を開いて、傍り憚らず騒ぎ立てる。

(大正八年二月号)

蜜柑の皮、フライピンス(フライピーンズ?)の袋、折箱、吸殻、落花狼藉、見苦しい、見苦しい。

(大正九年三月号)

湯から出て歌劇場に入ると、一杯の煙草の煙だ。楽屋の方から盛に青い燈火が歌劇場にみなぎって、煙の中に観客が outcome もやらず行きもやらずしてゐる。

(大正二〇年五月号)

二階の人は成るべく下へ物を落したりすることを止めていただきたい。ひどいのに成ると、ミカンの皮や袋のしがみ粕を下へする人があります。

(同前)

「成るべく」ではなくて「絶対に」だろ!! 三番目の苦情により、場内にはタバコの煙がモヤモヤ立ち込めていたらしいことがわかる。禁煙の表示もあるにはあったが、当時の寄席や芝居小屋ではこれが普通の光景だったのかもしれない。一階正面席での喫煙飲食など不行儀は、さすがに演りにくいとし生徒たちもこぼしていたようだ。

宝塚少女歌劇、はじまりの夢  
小竹 哲・著

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）  
定 価：1,980 円（10%税込）  
発売日：2023 年 3 月 24 日  
I S B N：978-4-7976-7424-8

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)